

# 昭和初期の知床観光 —「観光の斜里岳と知床半島」にみる地域の魅力

乙部純子

099-4122 北海道斜里郡斜里町峰浜 55

## The Sightseeing of Shiretoko in the 1930s —What Does the Bird's-eye View of Shiretoko Tell Us?

OTOBE Junko

55 Minehama, Shari, Hokkaido 099-4122, Japan

This paper aims to clarify the sightseeing on the early periods of Showa by analyzing the bird's-eye view for sightseer depicted in 1930s.

This analysis shows that the main sightseeing places in these days were not regarded as those in the past. People enjoyed the beauty of mountains and the culture of natives. In this sense it can be said the sightseeing which Shiretoko at present aims at existed in sight seeing 70 years ago.

### はじめに

昭和初期の知床、と聞いて、何をイメージするだろうか？ 農業開拓、硫黄採掘、殖民軌道、道路開鑿など、想起する言葉はいくつかあげられよう。しかしその中に「観光」という語が入ると、どうだろうか。おそらく奇異に感じるのではなからうか。

しかしながら昭和初期、観光のための美しい鳥瞰図が描かれている。斜里町立知床博物館に所蔵される「観光の斜里岳と知床半島」(図1)である。知床岬より濤釣沼までをオホーツク海斜里沖の架空の視点から俯瞰し、横長の画面に大胆かつ明瞭に描く、多色刷りの美しい鳥瞰図である。広範囲を1枚の紙面に表すこの図には極端なデフォルメがなされており、図の左上には見えるはずのない札幌や函館などの都市名が記載される。裏面には周辺の詳細な情報を記載した文章や写真があり、観光ガイドマップとしての役割を果たしていたと思われる。

これまで、昭和初期の知床の観光について述べている研究は管見の限りみられず、その実態は明らかにされていない。また本鳥瞰図については、

これまでに宇仁(2002)および藤本(1999)で紹介されているものの、詳細を分析したものはみられない。

本稿では「観光の斜里岳と知床半島」鳥瞰図に表現された内容、及び裏面に記載された文章、写真などの情報を分析することにより、昭和初期における斜里及び知床の観光について考察していく。

### 鳥瞰図を分析することの意義

観光用にデフォルメされた鳥瞰図は古くから描かれてきた。19世紀の江戸時代には、街道と宿場、川筋をわかりやすく表現した「日本国道中図」などの道中図のほか、葛飾北斎による「東海道名所一覽」、鋏形恵斎の「日本絵図」など極端な遠近法や独自の表現法を用いた絵図が描かれている(湯原2002)。幕末から明治期には五雲亭貞秀による都市鳥瞰図が数多く世に送り出されており、大正期には商業資本と結びついた観光マップとして、大胆にデフォルメされた鳥瞰図が吉田初三郎(1884-1955)をはじめ、多くの絵師によって描かれている。



図 1. 「観光の斜里岳と知床半島」より鳥瞰図「斜里村大観」全図，斜里町立知床博物館蔵。

鳥瞰図は、地表を測量結果に基づき正確に描いた地図ではない。だからこそ作成者の主観的な地域認識やその土地に関する知識が盛り込まれており、これらの情報は鳥瞰図の読者にも伝達されていく。図を分析することにより、作成時に把握されていた地域像が明らかにされるとともに、人々が持っていたであろう地域イメージも読み取ることができる(乙部 2002)。

本稿で扱う鳥瞰図は、自らを「大正の広重」と呼んだ鳥瞰図絵師、吉田初三郎の弟子にあたり、大正 11 年に離反し、創作活動を続けた金子常光によって描かれている。大正、昭和期に流行した吉田による鳥瞰図の表現法すなわち、鳥でも見ることができない地形をもイメージ化し 1 枚の図の中に表現する、を反映した、吉田最大のライバルといえる金子の鳥瞰図は、吉田の鳥瞰図とともに高く評価されている。金子が描いた「観光の斜里岳と知床半島」は近代における斜里および知床の鳥瞰図としては、おそらく唯一の作品であるとみられ、当時の景観および地域認識を確認できる資料として貴重なものである。

### 昭和初期という時代

何かかこまったり学んだり、人生上の教訓を得たりする「旅」に対し、とにかく自分の知らない土地・人・風俗に感動し、楽しむ「旅行」。この「旅行」が急速に大衆化したのは、「戦間期」と呼ばれる、第一次世界大戦終結から第二次世界大戦開戦までの、大正から昭和初期である。この時期には旅行の大衆化を後押しするポイントがいくつかある(白幡 1996)。

1 つ目は、交通網の整備である。1872(明治 5)年に横浜-新橋間で走り始めた鉄道は急速に普及し、交通が革新的に進歩した。開国により江戸時代の旅の阻害要因であった関所が撤廃され、移動が自由化された。また、鉄道路線が充実したことに伴い、旅館などの宿泊施設が増加、交通と宿泊の条件が整っていった。

2 つ目は、国立公園法の制定である。大正末から地理学者、林学者などが日本にも国立公園が必要だと主張し、1931(昭和 6)年国立公園法が制定された。そして 1934(昭和 9)年 3 月に雲仙、霧島、瀬戸内海の 3 つの国立公園が誕生し、これに引き続き、同年 12 月には阿寒、大雪山、日光、

中部山岳，阿蘇の5つが国立公園に指定されている。国立公園法の制定により，近代的な風景観が確立，すなわち旅行に行ってみるべき対象が確立されたのである(横山2006)。

3つ目は，観光による外貨獲得のための国策である。「観光」とは「楽しみのための旅行」であると定義できる。「観光」という言葉は，大正時代，ツーリズムの訳語として「観光」の語があてられたことにはじまる。1930(昭和5)年，政府により鉄道省に「国際観光局」が設置されたことで，「観光」という語が広く使われるようになった。同年，「Beautiful Japan」キャンペーンが鉄道省によって繰り広げられる。観光による外貨獲得を目指した当時の国策は，やがて日本人の観光旅行の大衆化へと進んでいく。

これらの要因により大衆化し，普及していった観光旅行がピークを迎えるのは，1936(昭和11)年ごろである。外国人による日本旅行，日本人の国内旅行が活発となり，旅行者，旅行業者，観光業者にとって極めて恵まれた年となった。しかしながら，1937(昭和12)年の日華事変より以降，旅行は享乐的だとされ，1940(昭和15)年には「不要不急の旅行はやめよう」と旅行・旅客の制限が打ち出された。そして1941(昭和16)年の夏ご

ろに，観光旅行は公の場から消えていくこととなる。本稿で扱う絵図が描かれたのは「戦間期」，観光旅行が大衆化しピークを迎えた時期である。

### 北海道における鳥瞰図の作成

藤本(1999)によると，北海道・樺太を描いた鳥瞰図及び鳥瞰図的な手法で作成された絵葉書，書簡図絵は約300点である。時代を戦間期に絞ってみると138点となり，最も多く発行されたのは1936(昭和11)年の38点となる(図2)。これは観光旅行のピークと重なるものであり，鳥瞰図などの作成が観光旅行の盛衰と連動していたことを示している。

地域別に見ると，小樽，樺太，函館，札幌，室蘭，旭川と続いており，都市の鳥瞰図が多い(図3)。図の作成主体は，各支庁や市町村役場とその観光課，商工会，観光協会など公的役割を担った機関が多くみられる。昭和に入る頃から大都市だけでなく，各市町村に観光課や観光協会が設置され始めた。市町村レベルで中小の博覧会が開催され始めるのもこの時期で，鳥瞰図数トップの小樽では1937(昭和12)年に北海道博覧会が開催されている。市町村のPRのため，美しく分りやすい鳥瞰図が作成されたであろうことが推測される。

図2. 戦間期(1916-1940)における北海道の鳥瞰図数の推移。藤本(1999)をもとに作図。

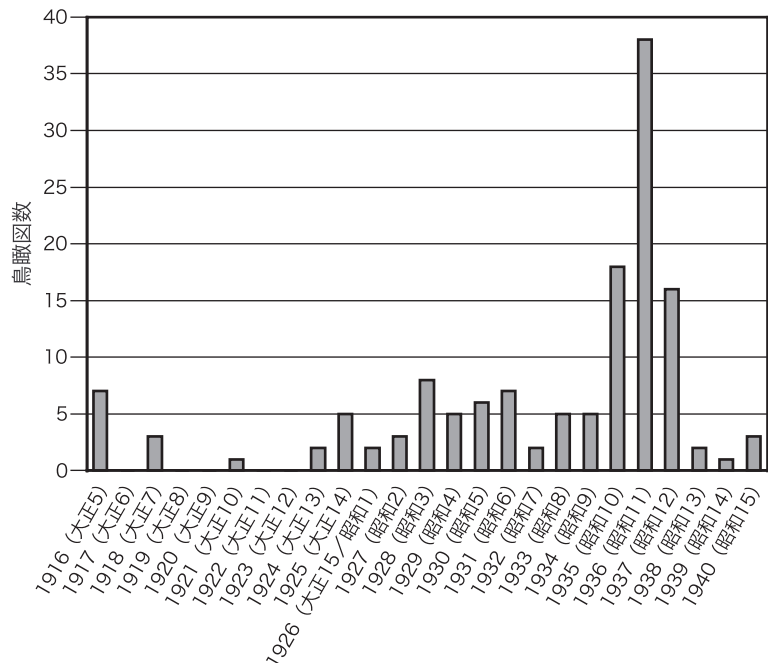








図4. 「観光の斜里岳と知床半島」表紙に描かれた景観。

図(以下「仮製図」と比較すると、ほぼ準拠していることがわかる(表1)。ただし、以下の点で相違がみられる。

- 仮製図には注記のないオライネコタン川、オンネベツ岳、ラサウヌプリ(現知西別岳)、サマツキヌプリがある。
- 硫黄山をチャチャヌプリとする。
- フンベ川をフンペオマペ川とする。
- オケッチウシ川をオケウナシベツ川とする。
- チャカババイ川をチャチャババイ川とする。
- 羅白岳を羅白山とする。

### 3) 鳥瞰図

トレース図を図5に示す。知床岬から知床連山、斜里岳、斜里市街地、濤釣沼までを、オホーツク海斜里沖の架空の視点から俯瞰し、横長の画面に

描く。図右手に「斜里村大観」と題字があり、おおよそ図の右側が西、左側が東を示す。手前に海を据えた構図は、鳥瞰図によく用いられる手法であり、本図は斜里及び知床半島をダイナミックに表現した図となっている。

図の主要な要素として、鉄道や主要道といった交通路、市街地の家屋と町割り、ランドマークとなる人工建造物、山、河川、岬、岩、滝などの自然景観などが挙げられる。表現方法は大正、昭和期に多数描かれた鳥瞰図の描法を踏襲しており、図中に詳細な地名表現を書き込んでいることから、ガイドブックとしての役割をもあわせもった図であるといえる。

図中の注記を表2に示す。斜里岳について、5つの滝と3つの池など計12もの詳細な注記があることがわかる。アイヌ語でオンネヌプリ(年老いた山)と呼ばれ、アイヌから畏敬の念を抱かされていた斜里岳。1936(昭和11)年、日食観測のため、英国人ストラットンらが訪れている(斜里町史編纂委員会1955)。斜里岳が本図の中でクローズアップして描かれる背景には、外国人の斜里岳来訪が意識されていると考えられる。

海別岳には、スキーコースが描かれる(図6)。本図の大部分は夏の景観であるが、海別岳西側斜面はスキーコースを表現するため、雪が描かれている。ほかに雪が描かれる場所として、現在の知床五湖周辺がある(図7)。知床五湖は当時まだ命名されていないため注記はなく、仮製図には台地が広がる様子が読み取れるのみである。図の作者は不明瞭な地に雪を描くことで、詳細な表現を回避したと考えられる。

知床連山に関する注記は仮製図の記載と同様、羅白岳、硫黄山と知床岳で、羅白岳と硫黄山の間に連なる山々の名称はない。

また、硫黄山は1936(昭和11)年2月から11月にかけて噴火、硫黄を噴出しているが、図中では山肌の色を黄褐色に表現しているものの、煙など噴火を示す表現はみられない。

河川については、支流を含めると30を越える川筋が描かれるが、名称が注記されるのは斜里川、猿間川、海別川、ペレケ川、イウベツ(イウベツの誤り)川のみである。

鉄道は赤い線で示される。網走から斜里、猿間川、上斜里を通り、釧路へつながり、北海道内の

表 1. 「斜里村地図」, 鳥瞰図「斜里村大観」と5万分の1地形図の注記比較.

5万分の1 仮製図 <sup>a</sup>	斜里村地図	斜里村大観	5万分の1 地形図 <sup>b</sup>
			ウイーヌプリ
			ポロモイ岳
知床岳	知床岳	知床岳	知床岳
			ルシャ山
			東岳
硫黄山	チャチャヌプリ	硫黄山	硫黄山
			知円別岳
			南岳
			オッカバケ岳
			サシルイ岳
			三ツ峰
羅白岳	羅白山	羅白岳	羅白岳
			天頂山
	ラサウヌプリ		知西別岳
	オンネベツ岳	遠音別岳	遠音別岳
	サマツキヌプリ		
海別嶽	海別嶽	海別岳	海別岳
小海別嶽	小海別嶽		小海別岳
			錐山
			瑠辺斯岳
			南斜里岳
斜里岳	斜里岳	斜里岳	斜里岳
江鷲山	江鷲山		江鷲山
知床岬	知床岬	知床岬	知床岬
獅子岩		獅子岩	獅子岩
			窓岩
ポロモイ川	ポロモイ川		ポロモイ川
アウンルイ川	アウンルイ川		アウンモイ川
			イタシュベワタラ
			観音岩
			レタラワタラ
オケッチウシ川	オケウナシベツ川		オキッチウシ川
			マムシの川
ポトピラベツ川	ポトピラベツ川		ポトピラベツ川
			知床川
			カバルワタラ
			カシュニの岩
			カシュニの滝
			チャラセナイ川
鮎岩		(鶴岩)	鮎岩
			タキノ川
チャカババイ川	チャチャバカイ川		チャカババイ川

表 1. 続き.

5 万分の 1 仮製図 <sup>a</sup>	斜里村地図	斜里村大観	5 万分の 1 地形図 <sup>b</sup>
テッパンベツ川	テッパンベツ川		コタキ川
ルシャ川	ルサ川		テッパンベツ川
ポンベツ川	ポンベツ川		ルシャ川
ウブシノッタ川	ウブシノッタ川		ポンプタ川
ウンメーン岩			ウブシノッタ川
			ウンメーン岩
			硫黄川
カムイワッカ川			カムイワッカ川
			カムイワッカの滝
イダシュベツ川	イダシュベウニ川		イダシュベツ川
			エエイシド岬
			五湖の断崖
イワウベツ川	イワウベツ川	イウベツ川	岩尾別川
			象の鼻
			チカボイ岬
			プユニ岬
			幌別川
ホロベツ川	ホロベツ川		ウトロ崎
ウトロ崎	ウトロ岬	ウトロ崎	ペレケ川
ペレケ川	ペレケイ	ペレケ川	チャシコツ崎
チャシコツ崎	チャシコツ岬	チャシコツ崎	フンベ川
フンベ川	フンベオマベ川		弁財崎
			オショコマナイ川
オショコマナイ川	オショコマナイ		オシンコシン崎
オシンコシン崎		オシンコシン崎	チャラッセナイ川
チャラッセナイ川			オシンコシンの滝
			オベケブ川
オベケブ川	オベケブ川		シャリキ川
シャリキ川			オンネベツ川
遠音別川	遠音別川		金山川
金山川	金山川		オショバオマブ川
オショバオマブ川			オチカバケ川
オチカバケ川	オチカバケ川		オライネコタン川
	オライネコタン川		糠真布川
糠真布川	ノツカマブ		シマトカリ川
			海別川
海別川	ウナベツ	海別川	奥薬別川
奥薬別川			斜里川
斜里川	斜里川	斜里川	ウエンベツ川
宇遠別川	ウエンベツ		

<sup>a</sup> 陸地測量部 1925 (大正 14) 年発行より.<sup>b</sup> 国土地理院「知床岬」1998 (平成 10) 年, 「ウトロ」1993 (平成 5) 年, 「斜里」1991 (平成 3) 年, 「羅臼」1997 (平成 9) 年発行より.





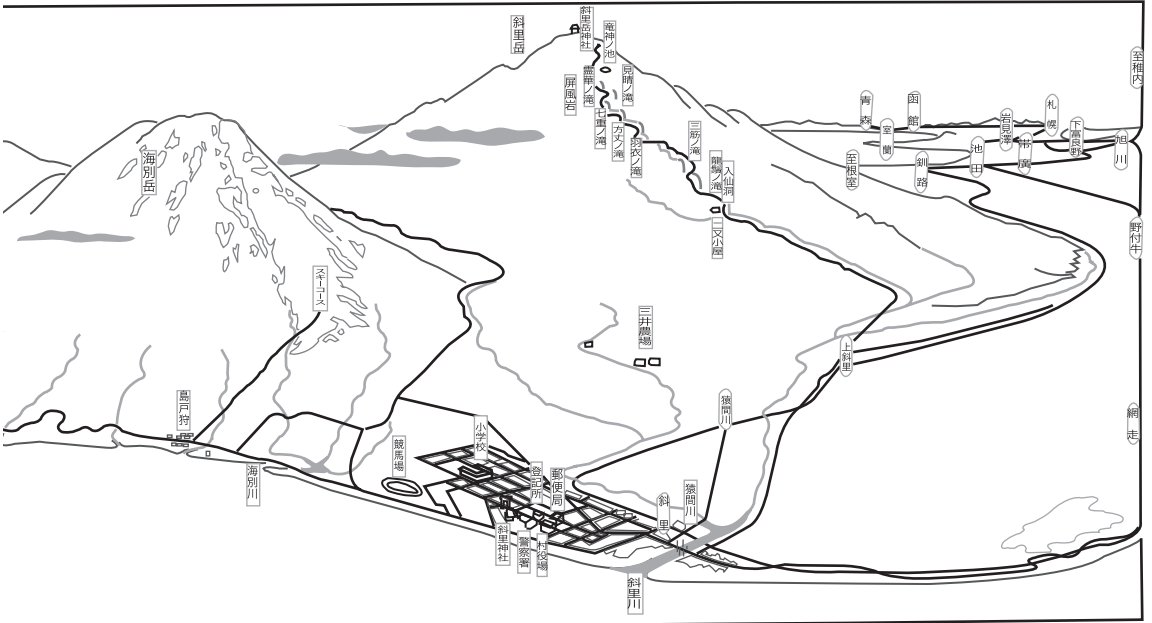


図 5. 続き.

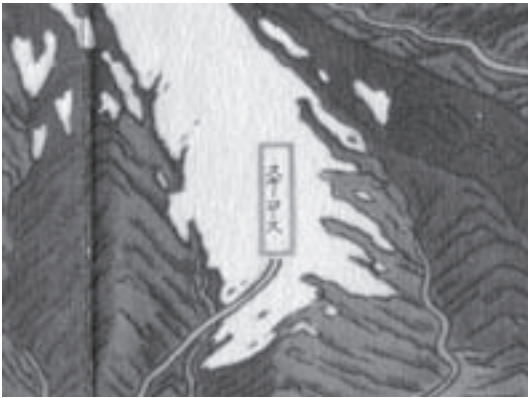


図 6. 鳥瞰図「斜里村大観」より海別岳のスキーコース.



図 7. 鳥瞰図「斜里村大観」より知床五湖周辺.

各都市とも連結しながら、青森へと続いている。一方、この時期にピークを迎えていた斜里-チブドマリ間の殖民軌道(斜里町史編纂委員会 1955)のルートについては記載されていない。

斜里市街地には、郵便局、登記所、村役場、警察署、斜里神社、小学校、競馬場が注記される(図 8)。競馬場を除くこれらランドマークとなる建築物の屋根は、すべて朱色で表現されている。現在もみられる「へ」の字の街路が描かれているが、村役場(現町立図書館)や警察署周辺の標高 10 m ほどの微地形は表現されていない。絵図にある競馬場は仮製図にもその形状が表現されているが注



図 8. 鳥瞰図「斜里村大観」より斜里市街地.

記されており、どのような形態であったかなどの詳細は不明である。

#### 4) 村の概略解説

鳥瞰図の裏面には文字情報として、町の沿革、地勢、産業、名所旧跡と、15枚の写真が掲載される。

##### ①沿革

1451(寶徳3)年を480余年前、斜里村の創始を貞享年間(1684-1687)、今より250余年とする。郵便や電信などライフラインの整備を含めた斜里の町の形成過程、そこに貢献した人物について、具体的に氏名を挙げ詳細に述べている。

人口の推移について、1902(明治35)年末斜里の戸数はおよそ300戸に過ぎなかったが、1907(明治40)年前後には各種事業が勃興し移民の来住が増加し、1914(大正3)年末には1,719戸になった、とする。また大正14(1925)年11月には網走-斜里間の鉄道が開通、更に昭和6年釧網線が完成し、著しい発展がみられ、「現在戸数」は2,739戸、人口17,000余人であるという。斜里町史第三巻編纂委員会(2004)による1914(大正3)年から1945(昭和20)年にかけての斜里町の人口の推移を表3に示す。昭和10年の人口は16,510人と500人ほど多いものの、「現在戸数」はこの年と同一の数値であった。

##### ②地勢

当時用いられることの多い科学的な言葉を用いながら(e.g. 鉄道省1936)斜里の地勢を語る。オホーツク海の「弓状沿岸線実に25里余に及」び、「羅白嶽」「斜里嶽」「海別岳」が「聳立」し、「斜里川は」「流域15里余に及」ぶという。そして斜里は「北見唯一の大平原地帯にて地味概ね肥沃にして農耕に適し本道殖民として囑望せらるる所なり」と結ぶ。殖民地として、いかに素晴らしい場所であるかを強調している。

##### ③産業

農業、水産、工業、林野、畜産の5項目からなる。

農業適地が広大であり、主産物としては米、馬鈴薯、小麦、甜菜、菜豆類を挙げる。米を最初に掲げているのは、殖民地としていかに適当な場所

表3. 1914(大正3)年から1945(昭和20)年までの斜里町の人口推移。

1935(大正3)年	1,719戸	
1918(大正7)年	3,350世帯	15,641人
1922(大正11)年	2,671世帯	11,944人
1925(大正14)年	2,437世帯	13,090人
1930(昭和5)年	2,491世帯	14,010人
1935(昭和10)年	2,739世帯	16,510人
1940(昭和15)年	2,518世帯	15,865人
1945(昭和20)年	2,505世帯	13,095人

斜里町史第三巻編纂委員会(2004)より作表。

であるかを強調したいという意図があるからであろう。

水産については、斜里沖合一帯が漁場として優れていることを述べる。

工業については、原料が豊富で「最近企業者多く、著しく活況を呈するに至る」とし、主たるものは、製材、澱粉、製飴、醸造、製粉等であるという。

林野や畜産についても、今後の可能性に大いに期待する、気候風土が牛馬の飼育に適し、養豚も将来を期待されるもの、と結んでいる。

それぞれの戸数、生産額が示されているが、農業戸数1,618戸、年産額1,714,000円、漁業50戸余、漁船数130艘余、年産額311,000円、工業年産額286,000円余で、農業に大きく偏っていることがわかる。

##### ④名所旧跡

斜里神社、ウトロ港、チブドマリ港、オンネヌプリ(斜里岳)、ウナベツヌプリ(海別岳)、ラウシヌプリ(羅白岳)、イワウヌプリ(硫黄岳)、イワウベツ温泉と先住民族遺跡の9つを取り上げている。

##### (i) 斜里神社

1801(寛政3)年5月松前藩差配人村山傳兵衛が、アイヌに神道を教えるため、私財を投じて建立したという斜里神社は、天照皇大神と住吉大神を奉祭したのを起原とする、と述べている。

斜里神社はもともと海に向かって立てられていた。内陸開拓の守護神社とするため、神社の向きを山側に向けたのは、1936(昭和11)年9月である(斜里町史編纂委員会1955)。鳥瞰図で斜里神



図 9. 鳥瞰図「斜里村大観」よりウトロ港周辺。

社の鳥居は山側を向いており、すでに神社の向きが変わっている状態が表現されている (図 8)。

#### (ii) ウトロ港

ウトロはアイヌ語起源であるとし、積丹及び、弁邊礼文 (現豊浦町礼文華) 海岸と共に北海道三大絶景と称される、という。先住民族は国後エトロフへの交易の根拠地としていたといい、和人が入ってきて以降、商船千石船寄港の天然港となっていると述べる。海流や地質、植物にも触れ、「硫黄羅臼知床」つまり現在の知床連山を背景とする雄大な素晴らしい景観があることを絶賛している。

コースは「海路汽船により斜里より 2 時間陸路 11 里 (内 6 里は殖民軌道に依る)」とする。この殖民軌道は斜里市街地からチップドマリ (現日の出) を結ぶ 17.9 km の斜里線をさす (田中 2001)。「5 月より 10 月頃までが探勝シーズン」で、釣りをし、オロツコ島 (現オロンコ岩)、チャシコツ岬等の城砦や穴居跡を見学し、絶景知床を探勝することを勧める。

街は約 20 戸で、新しい駅通があるとするが、鳥瞰図に建物を表現する図像の記載はみられない (図 9)。また、約 60 m あるオロツコ島の標高を「30 余 m」としている。17.9 km の殖民軌道の距離を 6 里 (約 24 km) としているなど、実際とは異なる点が見られる。

#### (iii) チプトマリ港

「チプトマリ」はアイヌ語で「船の入る潤」を意味し、天然の避難港であり、ウトロ港と共に良い

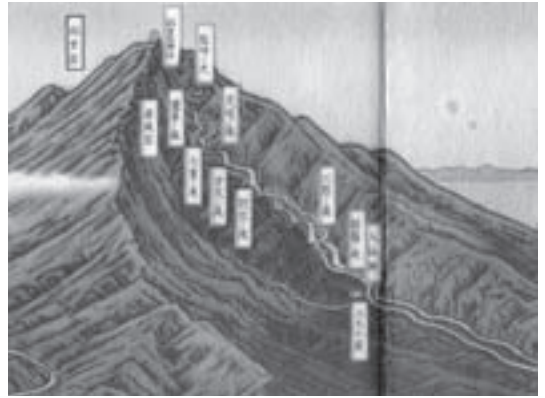


図 10. 鳥瞰図「斜里村大観」より斜里岳。

漁場があり、釣りに適し、将来漁港修築を約束されている、という。また、斜里駅より「6 里ローカルカラーな殖民軌道」で「わずかに 2 時間で達し得る軌道終点」であり、「ウトロ、イワウベツ、ラウシへの陸行者の旅人のオアシス」で、「先住人のピラチャシ (崖城砦) が現存して往古を忍ぶに足るもの」であるとする。

鳥瞰図には隣接する「鳥戸狩」(現峰浜) にいくつかの建物の図像がみられるものの、チップドマリには図像はみられない。また上記と同様、殖民軌道の距離は「6 里」となっている。所要時間は 2 時間で、かなりゆっくりとしたペースで走行していたことが伺える。

#### (iv) オンネヌプリ (斜里岳)

斜里岳は「北見のmatterホルン」であり、「本道緒岸に見られぬ古典的な麗山」で、「釧網線車中の旅愁を慰めてくれる大きな存在」であり、「祇の霊峰」であるとする。先住民族は羅臼岳とともに斜里岳を神聖視し、「古来尊崇措かなかった魅惑の大伽藍である」と絶賛する (図 10)。

登山道について、釧網線の最寄駅上斜里駅からの距離と、案内板の設置頻度、休憩所の数など詳細な記述がある。登山道沿いの林相についても「白樺の一斉林」や「ハイマツ地帯」などと、具体的に記述している。

海拔 800 m 地点に 12 坪の新しい「二股ヒュッテ」がある、とする。1936 (昭和 11) 年の日食観測のための施設であると考えられる。

登山道沿いに「入仙洞」(現仙人洞) があり、「龍髯」「羽衣」「方丈」「七重」「三眺」「登龍」「霊華」

などの滝があり、霊泉「龍神の池」があるとすが、「三眺」「登龍」は現在確認できず、鳥瞰図にも記載されていない。

登山道でみられる白樺林を「ローマンテック」と表現し、お花畑の群落を「可憐な」と記載する。斜里岳登頂には8時間を要すが、登頂すれば硫黄岳（現硫黄山）や摩周湖、屈斜路湖、太平洋上の千島列島が望め、「アルピニストの血は躍るもの」があるとす。シーズンは7月初旬以降が最適であり、最近では冬の登山者が増加しており、「アルピニストがあこがれてくる名峰である」という。

#### (v) ウナペツヌプリ（海別岳）

斜里岳の男性さに比べて「柔和な山容」である海別岳は「ホマコニーデと思はれる大火口を有する休火山」であるという。

針広混交林とハイマツ地帯、山頂付近の豊富な高山植物が「アルピニストに呼びかけている」とし、斜里岳と同様植物相についてのべている。山頂からは、「大雪連峰」「オホーツク海太平洋千島列島、知床岬」が眺められ、「一日行程のハイキングコース」であるという。「近時夏季よりも特に冬季スキー登行者激増」しており、「クラシクな殖民軌道（冬季休止）により約12km 島戸狩市街地一泊の登行こそ、山の醍醐味を満喫しうる100パーセントの行程である」と結ぶ。

激増するという冬季のスキー客らがどのようにして島戸狩まで到達したのか不明であるが、殖民軌道を楽しみ、山を満喫するという海別岳一日プランがあったようだ。

#### (vi) ラウシヌプリ（羅白岳）

海拔1,661mの「王座ラウシ」は、ウトロ港から約12kmのイワウベツ温泉から入山する、現在のイワウベツルートを利用するという。山頂の展望は斜里岳にも勝り決して劣らぬ、と述べる。

未踏のコースを多分に持つ羅白岳は、アルピニストにとって「あこがれ」と「挑戦」とを常にもつが、一方でお花畑の大群落あり、雪渓あり、水あり、キャンプに絶好の処がある、とする。現在よりも経験豊富なアルピニスト向けの山として認識されていた様子がうかがえるが、その利用は現在の羅白岳登山道と同様であったと想定される。

#### (vii) イワウヌプリ（硫黄岳）

著しい火口2箇所と物凄い熱湯の噴出口をもち、1880（明治13）年9月及び24年に大爆発があった、とする。ハイマツ及びお花畑の群落あり、7月でもまだ大雪渓があり、アルピニストから「知床マッターホルン」と呼ばれる、とする。

登山コースはカムイワッカより硫黄採掘路を利用していく、楽な一日行程である、という。斜里からウトロを経て陸路で64kmあまり、イワウベツ温泉より約8kmあまりである、という。

#### (viii) イワウベツ温泉

アイヌにより発見された知床火山帯中唯一の温泉であり、原始的な幽邃さと全然俗化を持たぬ神秘境が、イワウベツ温泉であるという。1935（昭和10）年12月冬の羅白征服を目指して山岳家黒田政夫初子夫妻が、本拠地をここに置いたので有名である、らしい。

イワウベツに行くには、2通りあったという。すなわち海路斜里駅より「ウトロ」港またはイワウベツ川尻まで約3時間航海をし、イワウベツ川を約12km遡江するか、陸路斜里駅からチプトマリまで24km殖民軌道に乗りさらに24kmにわたり山紫水明の風光を賞でつつ陸路でウトロまで行き、更にポロベツから馬道約11km余でイワウベツ川につき、川を遡江するか、である。

温泉には15坪のキャンプ小屋があるのみだが、「神経過敏な俗塵を離れて大自然のふところに駒鳥の音を聞きつつ湯壺に浸るキャンプマンの生活こそ、一片の詩であり歌である」という。「知床尾根制覇のアルピニストがリュックを卸し征衣をすすぐ屈覚のオアシスとして知られている温泉」とであると述べる様子は、現在の利用形態と同様である。

#### (ix) 先住民族遺跡

「滅び行く土俗文化史を糾明考証することは、今日及び明日の大きな課題でなければならぬ」と述べる。自然に恵まれ、天然の要塞でもある知床は、「種族魅惑の天地」であり、悲讐と闘争の修羅場でもあった、という。遺跡として3項目とアイヌの現況について述べる。



### チャシ (砦)

ピラチャシで現存するのは、チブドマリ (船の入る澗の意) ポロモイ (大湾の意) と 1935 (昭和 10) 年 5 月発見のガッタンコチャシで、インカルシチャシ (眺瞰砦) はチャシコツ (砦の処) とオロツコワタラ (オロツコ族の居たと云う岩島) であるという。いずれもカムチャツカ、シベリアなどのもとの同一の形式で北方民族南遷史を裏づける格好の資料である、と述べる。

### 穴居址 (竪穴)

石器時代先住民の遺跡で、ウエンベツ川から知床岬まで及ぶ範囲に百数十ヶの穴居址があり、という。更に半島突端まで断続して「シレトクコタン」「オンネベツコタン」「ウヌベツコタン」「シャリコタン」の大集落の存在した、という。

### 遺物散列地及古墳

穴居址と同様の範囲に広がる石、土器は足利時代以後のものと考えられているが、定説ではない、という。ウナベツ以東は、厚手縄紋土器以外薄手縄紋土器が出土されているが、詳細は不明なようで、発掘されるものとして、完全な土器は極めてまれで、石器は石槍、石包丁、石錐、石匙、石斧、石小刀、石鏃、石皮刺、などだという。

### 現住旧土人

ウナベツコタンの和風化した旧土人は 13 戸、祖父の地を守りながら農業を営むという。「近代人」となり離散するアイヌたちをいたわりながら、子弟中には和人を凌ぐ秀才も在って何れも自作農家として明日を約束されている、と結んでいる。

### ⑤写真

本図の作成主体である斜里村役場を右上に比較的大きく示し、上段には、斜里神社、斜里岳の遠望、斜里海岸の流水、知床絶端根北国境、知床の鷲岩、霊華の瀧、の 7 枚、下段に斜里市街の全景、上斜里市街の一部、ウトロ湾の絶景、竜神の池、斜里駅、三跳の瀧、斜里山麓の原始林、水簾の瀧、の 8 枚、計 15 枚の写真を挙げている。このうち 6 枚が斜里岳に関するもの、5 枚が斜里市街など建造物に関するもの、4 枚が知床半島に関するものとなっている。

また写真では流水や知床半島先端部、鷲岩といった④名所旧跡で挙げられておらず、鳥瞰図上でも何の表現もされていないものも挙げている。一方で、先住民族遺跡に関わる写真は挙げられていない。

発展しつつある村の様子をアピールするとともに、素晴らしい自然が多くあることを主張する写真を選択し、掲載したと想定できる。

### 昭和初期の知床観光の一考察

近代日本における風景論のひとつの特質は、外部からの圧力によって自らの風景へと目を向けていく、そのあり方である。風景とは、外部からの視線によって形成されるとともに、既存の風景が再認識され、「成長」していく (松畑 1997)。地図や絵図には、その時代と権力が多分に反映され、しばしばこれらの読者を操作をもしていく (Cosgrove & Daniels 1984)。近代化により、それまで宗教色の強い登山の対象であった山が、西洋のスポーツとしての登山へと変わり、スキーとともに限られた富裕層に普及していく。鉄道発達前までの美の概念は歌枕的な名所であったが、俗塵をのがれた大自然が愛でられるようになった背景には、鉄道網形成による近代化の結果として「成長」してきた美意識がある。

本図の中で、斜里岳は「北見マッターホルン」と呼ばれ、硫黄山を「知床マッターホルン」と呼ぶ。これは本州における「日本アルプス」(小島 1992) や「日本ライン」のような命名と同じ流れのもので、外国にも決して劣らない山岳美が、日本の知床にもあることを示している。また、「ローマンテックな白樺林」、「可憐なお花畑」、「クラシックな殖民軌道」などは、当時現地に入植していた人々の口からは、決して出てこない言葉である (斜里女性史をつくる会 1989, 1991, 1992, 1996, 2000)。これらは観光という形で、外部から当該地域を再認識することにより形成され、成長した風景観であり、本図の多くの箇所で見られる。主張されているのである。

本図では先住民族の文化遺産について比較的多くを語る。写真の掲載は認められなかったものの、先人たちの功績を見つめ、評価する視点を持つ。これは、学びの姿勢を色濃くもつ前近代における「旅」の要素を反映しているものと思われる。一



方で、現在の観光にとって必須の要素となっている、食に関する記述が極めて乏しい。この時期には、いまだ「食」は観光の主たる目的のひとつとはなっていないからである。

村の概略説明では述べられていたものの、鳥瞰図には殖民軌道が描かれない。おそらく仮製図にそのルートの記載がなかったからであろう。また、三井農場は描かれているが、殖民区画やそれらに関わる人々に関する記載はみられない。知床五湖周辺が雪で覆われていたように、都合の悪いこと、わからないものは、図の作成者の意図により描かれない。図は不都合な部分を表現せず、「沈黙」するのである。

ここで本図が描かれた時期について、考えてみたい。この図には刊行された年月を示す記載がないが、様々な場面で年代を特定する記述がみられる。それは以下のようなものである。

- 1451 (寶徳 3) 年は 480 余年前、斜里村の創始を貞享年間 (1684–1687) より 250 余年前とする。
- 1935 (昭和 10) 年 12 月山岳家黒田政夫初子夫妻が冬の羅白征服を目指す。
- 1935 (昭和 10) 年の「現在戸数」を示している。
- 1936 (昭和 11) 年 9 月に向きを変えたという斜里神社の鳥居は、すでに山側を向いて表現されている。
- 海拔 800 m 地点に 1936 (昭和 11) 年の日食観測のための 12 坪の新しい「二股ヒュッテ」がある。
- 1936 (昭和 11) の硫黄山の噴火については、記載されない。
- 1935 (昭和 10) 年 5 月発見のガッタンコチャンについて記載される。

以上から、図作成のための聞き取りを含めた現地調査を 1935 (昭和 10) 年ごろ行い、1936 (昭和 11) 年に本図は完成した、と推測される。

写真の中に斜里駅があったが、この写真の右端には跨線橋がみられる。宮内 (2007) は斜里駅の跨線橋の設置年代を 1934 (昭和 9) から 1973 (昭和 12) 年の間としているが、本図の作成年から、少なくとも昭和 11 年には設置されていたと想定されよう。

## 結びにかえて

2005 年に世界自然遺産に登録された知床。現在の知床観光の目玉は、知床五湖、フレベの滝、オシンコシンの滝、観光船、カムイワッカ湯の滝、知床峠などの観光地と、魚介類を中心とした「食」である。これらはこの図が描かれた昭和初期にはなかったものばかりだ。だが、本図は外部からの新たな視点で 70 年前の斜里岳と知床を魅力的に表現し、読者に訴えかけている。昭和初期の知床観光の魅力、それは素晴らしい自然と先住民族の文化遺産であった。今、釧路湿原を走るノロッコ電車に人々が集まり、ロハスやスローライフといった言葉が流行り、フットパスが導入されつつある。70 年前の鳥瞰図を眺めながら、現在の知床観光がより良い方向へと進んでいくことを願ってやまない。

本稿では「観光の斜里岳と知床半島」を分析することで、昭和初期の斜里及び知床の観光について考察した。しかしながら、本図作成の経緯や現地調査のあり方については推測の域を出ず、実際に観光に訪れた人々の動向についても不明である。また、この図の流布した範囲や期間についても分っていない。これらの諸問題の解明を、今後の課題としていきたい。

## 謝辞

本研究の骨子は「2007 年度第 8 回しれとこゼミ」にて報告した。本研究に対し、斜里町立知床博物館、ゼミ参加の皆様には数多くの有益なご助言を賜った。この場を借りて御礼申し上げる。

## 引用文献

- Cosgrove D. & Daniels S. 1984 (千田稔・内田忠賢監訳 2001). 風景の図像学. 459 pp. 地人書房, 東京.
- 乙部純子. 2002. 19 世紀末の横浜外国人居留地の景観—「横浜真景一覽図絵」からみた土地利用状況—. 歴史地理学 44(5): 22–37.
- 小島鳥水 (著)・近藤信行 (編). 1992. 山岳紀行文集 日本アルプス. 444 pp. 岩波書店, 東京.
- 白幡洋三郎. 1996. 旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」. 256 pp. 中央公論社, 東京.
- 斜里町史編纂委員会 (編) 1955. 斜里町史. 939

- pp. 斜里町, 斜里.
- 斜里町史第三卷編纂委員会. 2004. 斜里町史 3. 1242 pp. 斜里町, 斜里.
- 斜里女性史をつくる会 (編). 1989. 語り継ぐ女の歴史 1. 123 pp. 斜里女性史をつくる会, 斜里.
- 斜里女性史をつくる会 (編). 1991. 語り継ぐ女の歴史 2. 125 pp. 斜里女性史をつくる会, 斜里.
- 斜里女性史をつくる会 (編). 1992. 語り継ぐ女の歴史 3. 169 pp. 斜里女性史をつくる会, 斜里.
- 斜里女性史をつくる会 (編). 1996. 語り継ぐ女の歴史 4. 129 pp. 斜里女性史をつくる会, 斜里.
- 斜里女性史をつくる会 (編). 2000. 語り継ぐ女の歴史 6. 167 pp. 斜里女性史をつくる会, 斜里.
- 田中和夫. 2001. 北海道の鉄道. 335 pp. 北海道新聞社, 札幌.
- 鉄道省. 1936. 日本案内記 北海道編. 299 pp. 博文館, 東京.
- 藤本一美 (編). 1999. 北海道の鳥瞰図一覽. 20 pp. 自費出版, 狭山.
- 松畑強. 1997. ランドスケープの認識論 近代風景の起源をめぐって. *Ten plus one* 9: 68-87.
- 宮内盛一. 2007. 写真から見る国鉄斜里駅舎の歴史. 知床博物館研究報告 28: 31-58.
- 湯原公浩 (編). 2002. 別冊太陽吉田初三郎のパノラマ地図. 150 pp. 平凡社, 東京.
- 横山秀司. 2006. 観光のための環境景観学—真のグリーンツーリズムに向けて—. 164 pp. 古今書院, 東京.
- 吉田初三郎. 1930. 絵に添へて一筆集. 255 pp. 観光社, 名古屋.